

## 新刊紹介

武部健一・土屋雷蔵・七宮 大 共著

### 第2巻 高速道路の計画と設計

近藤茂夫・杉田美昭・千葉博敏・佐鳥悦史 共著

### 第6巻 道路舗装の施工

村上良丸・長友成樹 共著

### 第9巻 道路トンネル

これらの著書は「道路建設講座」全12巻のうちの一冊で、今回刊行の運びとなったものである。この講座の目的としているところは、最新の道路技術の理論と実際について、勉強する時間をなかなか持つことのできない土木現場マンに習得してもらうことにあり、製本や体裁にも工夫がこらされている。

まず、第2巻の「高速道路の計画と設計」については編集の全体方針として単なる基準の解説をすることを避けることにつとめ、物の考え方に重点を置いて、実践的な指導書となりうるようにしてあり、また、設計自体の解説をすることよりも、道路計画全体における“位置づけ”に重点をおき、もっぱら読者の思考力や判断力の醸成に主眼がおかれたものである。内容としては、第1章概説、第2章路線計画、第3章高速道路の設計、第4章高速道路の段階建設に分けられ、平易な叙述でわかりやすい。第4章では、よく問題となる段階建設についてかなりのページ数がさかれている。

第6巻の「道路舗装の施工」においては、総論、路床および路盤の施工、アスファルト表層・基層の施工、コンクリート舗装の施工、品質管理と検査を内容としているが、舗装の工事に際して問題となることに重点をおいて解説が行なわれている。また、最近舗装工事機械化施工ということから、各種機械の得失について、かなりの留意が払われて述べられている。本書は日本道路公団や舗装施工会社の中堅クラスの技術者によってとりまとめられたものであるため、内容は新鮮さが感じられる。

第9巻の「道路トンネル」については、トンネルの需要が新しい時代にあることを、著者は強調している。すなわち、1970年6月、OECD（経済協力開発機構）が、“トンネルを中心とした地下開発技術の革新”を1970年代における重要課題に取り上げたこと、トンネルが都市においても地下利用（たとえば、地下鉄、地下道路、通信施設）上重要な役割をになってきていること、1967年のPIARC（国際道路会議）大会で各国共通の技術指針がまとめられたこと等をふまえて著作が行なわれたもので、広汎な内容を整理して、かなりの力作になっている。

山海堂刊、A5判、②386ページ/1500円、④413ページ/1400円、④466ページ/1800円、昭和47年2月25日受付。

[ほ]

大浜嘉彦 著

## 高分子防水

近年、高分子材料は従来から使用されているセメント、砂利、鉄鋼材料などととも、建設材料の一つとして使用されるようになってきた。その用途は、新旧コンクリートの打継目の処理、防食塗装などの塗装や止水器材、およびプラスチックコンクリートとしての使用などであった。これらの使用は、高分子材料の接着性、耐化学性、耐水性をたくみに利用したものであり、今後ともこのような使用法、すなわち防水に対する高分子材料の使用は広く行なわれるものとする。また、防水といえばアスファルト防水に代表されているが、新しい工法としての高分子防水は、この分野の革新として注目されつつある。

本書は、6つの章と付録により構成されている。すなわち、1章に高分子防水に対する概説、2章にシート防水、3章に塗膜防水、4章に高分子混入モルタル防水、5章にシーリング材による防水、6章に止水板、グラウト材、遮水膜などによる高分子防水を、その章に関連する材料に要求される性能条件・規格・試験方法・製造方法・製品の性質および施工方法などについて、最新の情報ならびに実験データをまじえながら詳解している。また、各章の終わりには多数の参考文献を収めていること、また、付録においては、高分子防水関係資料を一覧していることは、研究者にとっても実務にたずさわる人々にとっても非常に役立つものとする。

以上のように、本書は、新しい高分子防水について、材料と工法の両面から、その全容を解説した、高分子材料ハンドブック的なものであり、本分野における推薦しうる本の一つと思うが、この種の本には索引は不可欠と考えるので、改訂にあたっては索引の収録を希望する。

[M]

高分子刊行会刊、A5判・500ページ、4500円、昭和47年2月9日受付。

### ご 案 内

昭和47年度の土木学会誌編集委員会書評小委員会は下記の陣容によって運営されますので、ご案内いたします。

委員長	鮎川 登		
委員	辻 松雄	中山 紀男	中山 靖之
	浜田 康敬	肥田木 修	福田 寛允
	前田 喜和	満木 泰郎	松本 修躬
	三浦 昭爾	村橋 正武	吉越 洋

書評小委員会